

# 会議録:第3回 出雲崎町立学校の在り方検討委員会

日時： 令和8年5月28日（木） 午後6時30分～午後8時05分

会場： 出雲崎町中央公民館 講堂

参加者： 委員14名全員、教育長、事務局員

---

## 1 開会

## 2 委員長あいさつ

前回は、統合やそれに伴う懸念、あるいは大事にしたいことなど、様々な観点から多様な意見が出され、共有することができた。本日は、前回共有した「大事にしたいこと」「考えなければならないこと」をベースとして、さらに一步進んだ「何を指すか」という具体的な話に少しでも近づける場にしたい。

出雲崎町では、どの施設にも、額に入った絵や書が丁寧に飾られており、文化・芸術的な環境が整っている。地域の当たり前かもしれないが、子供たちの感性に響く芸術作品が大切に扱われていることは非常に貴重である。

これらは先人たちが作り上げたものや、東京芸術大学との関わりなど、様々な背景・土壌があって子どもたちの育つ環境が成り立っている。この豊かな環境をどのように次へ繋ぎ、活かしていくかという点についても、本日の会議で意見を出しながら目指すものを共有していきたい。

## 3 協議事項 副委員長が議長を務める

### (1) 第2回検討委員会の振り返り

事務局が議事録を基に内容を確認 → 質問、意見はなし

### (2) 長岡市立深沢小学校の視察報告

- 5/27（水）の午前中に10名の委員が参加して、複式指導の授業の様子を参観するとともに、学校運営について説明を聞く機会を得た。本会議では参加者の感想等を共有した。次のような感想が挙げられた。
  - ・非常に良い環境であり、先生方が真摯に子供たちと向き合っている印象を受けた。複式指導の在り方と少人数指導の効果については、出雲崎町として慎重に見極めていく必要があるのではないか。

- ・複式指導の様子を参観するのは初めてであった。校長先生のお話から、学習内容や学習時間については、6年間を通じて単式学級と変わらないものであると説明を受け、事前の漠然とした不安（複式学級に対する懸念）が解消された。
- ・極小規模校だからこそできる、一人ひとりに対する非常に丁寧な見守りと指導が生きている学校だと感じた。「少人数だからこそできること」に目を向け、教育を行っていかうとする姿勢に非常に好感が持てた。
- ・教科によっては「AB年度制」という方法が取り入れられている点に着目した。これは「個別最適な学び」にも通じる部分があり、進め方を工夫することで、児童にとって興味深く、面白い教育方法になるのではと感じさせられた。

### (3) グループ協議

テーマ「出雲崎町の宝（よさや特色）を活かした教育活動を学校と地域が一体となり充実させていくには」

#### ● 教育長より説明

前回（第2回）の検討委員会で各委員から出された「グループ協議のまとめ（キーワード）」（資料1及び2）を基に、ハード面（施設・設備）とソフト面（支援体制）の以下の2つの視点から具体化を図りたいと考えた。

#### 【視点①】最適な学校の施設・設備はどうあるべきか（ハード面）

第2回のグループ協議①「出雲崎町のよさを育むキーワード」を基に、それを実現するためにどのような学校施設や設備が必要か、具体的なイメージを協議してもらいたい。

##### ➤ 第2回で挙げられたキーワード

「郷土愛・歴史・自然を育む」

「未来への翼を広げるスキル・外へのつながり」

「少人数やICTを活かした学び」

##### ➤ 具体的な検討の方向性

- ・出雲崎町の「宝（よさや特色）」を活かした活動や、少人数・ICTを活用した学びを形にするための学校施設・設備を考える。
- ・例えば、前回の提案にあった「ワクワクする図書館を学校の中心に配置する」というデザイン。これは子供たちの好奇心を刺激するだけでなく、「多世代の人たちが関わる学校」にするための空間づくりという意図が含まれている。このようなイメージを基に、キーワードと関連付けながら意見を出し合う。

#### 【視点②】住民が学校を支援する体制はどうあるべきか（ソフト面）

学校だけでなく、地域全体で子供たちを支えるためのソフト面の仕組みや支援体制について協議してほしい。この視点については、来年度を待たず「明日からの学校教育」にもすぐに活かせる内容としても位置づけられる。

➤ **第2回で挙げられたキーワード**

「歴史・文化の継承」（良寛さまの生き方・書・良寛学習、町の歴史を語る子供の育成など）

「伝統文化の継承ができる子供を育てる」

➤ **具体的な検討の方向性（地域からの支援のあり方）**

学校だけの力では達成できず、地域の支えが不可欠であるため、キーワードと関連づけながら、どのような支援体制が望ましいかを考える。

- ・組織づくり：コーディネーターの配置など。現在はコーディネーターが不足している状況もあるため、どのような組織体制が必要かを検討する。
- ・ボランティアの拡充：現在は多くの地域住民がボランティアとして無償（交通費も自己負担）で学校に関わっているが、この体制のままでよいのか、あるいはさらに学校に関わる人を増やすためにどのような体制が必要かを考える。
- ・広報活動の充実：地域住民に協力を呼びかけ、支援を募るための広報のあり方について検討する。

→ 質問・意見なし

(4) 各グループからの発表

■ **グループB：町の機能の集約と少人数を見据えた環境設計**（発表：A委員）

視点1：ハード面：町の機能集約と、先進的な遠隔交流の環境整備

- **中心拠点への集約（ハブ化、コンパクト化）**：学校、役所、公民館、図書館など、町の主要な機能を1つのエリア、あるいは1つの施設に集約させる。これにより、地域住民も保護者も効率的かつ安心して利用できる街の拠点が生まれる。
- **給食設備の更新**：現在、中学校の給食室の老朽化が進んでいる現状を踏まえ、一貫校化に合わせた給食提供体制の整備・設備新設を重要な課題として位置づける。
- **「リモート交流専用室」の設置**：【小規模校の課題へのアプローチ】子どもの数が減少すると、人間関係の固定化や「多様性を学ぶ機会の不足」が懸念される。これを解消するため、近隣や遠方の学校と「兄弟校（姉妹校）」のような関係を結び、日常的に交流を行う。そのために、大画面でストレスなく一斉に遠隔交流ができる「専用のリモート環境の部屋」を整備する。

視点2：ソフト面：地域の力を借りた放課後の充実と授業サポート体制

- **放課後子ども教室**：児童クラブの充実：授業が終わった後の先生方は、次の授業研究や事務作業に集中すべきである。そのため、放課後の時間は「地域の力」を全面的に借りて運営する。出雲崎の特色を活かした「習字（書道）」や、これからの時代に必要な「英語」など、多様な学習プログラムを展開し、保護者が安心して迎えに来られる仕組みを作る。
- **複式・少人数授業を支える「補助員（サポートスタッフ）」の配置**：今後、学年をまたいだ複式授業や合同授業が増える可能性がある。図工や家庭科などで「時間や内容をずらしながら」授業を行う際、担任1人ではなく「教員補助員」が、必ずペアで入る体制を国や自治体の後押しによって確立させる。これにより、子どもの数が少なくても質の高い、手厚い教育が可能となる。

## ■ グループA：歴史・文化の継承と、持続可能な地域協働の仕組みづくり

（発表：B委員）

### 視点1：ハード面：地域の宝を内包した施設設計

- **歴史と自然の融合**：学校内に、出雲崎の歴史を学べる施設や機能を組み込む。敷地内の自然環境へのアクセスを重視し、ほなみが丘一部を「梅林」にするなど、出雲崎ならではの景観を作る。
- **良寛さまとつながる学校**：良寛記念館と学校を空間的・機能的につなげる。子どもたちの学びの場となるだけでなく、町外からの来訪者が「学校＋良寛記念館等の施設」を一体的に巡れる環境を目指す。西照坊などの歴史資産の継続維持が課題であることから、子どもたちが取り組んでもよいのでは。
- **小中一貫校における空間分離の配慮**：小中一貫の建物であっても、グラウンドや体育館は「小学生用」と「中学生用」で別々に確保できるのが望ましい。小学生が体育祭を楽しんでいる横で中学生が受験勉強をしているような状況は、互いにとって望ましくない環境になりかねないため。
- **多世代が集う共通スペース**：地域住民が利用できる図書館（小中の幅広い年齢層に対応した蔵書）や体育館に加え、住民も一緒に食事を楽しめる「食堂」の設置を提案。

### 視点2：ソフト面：よりリアルな地域学習と「ボランティア不足」の解消

- **地域住民が「先生」になる授業**：地域の人が講師となり、勉強だけでなく町の行事、文化、伝統を直接子どもたちに教える機会を作る。地域クラブの継続も。また、減少している地元の「漁師」の元へ、子どもたちが自ら出向いて話を聞くなどする。
- **サポーター養成の仕組みづくり**：「関わりたいがどうすればいいかわからない」という住民のために、コーディネーターやボランティアの要請講座・研修の機会を設ける。
- **ボランティアの持続可能性と行政の関与**：

【課題提起】 地域協働を進めていきたいという一方で、現実には「担い手不足（高齢化、1人で何役もの負担、日中、若者は仕事により不在）」という高い壁がある。有志の善意や無償ボランティアの募集だけでは機能しない可能性が高いため、せめて交通費や謝礼を支給する仕組みが必要。さらに一歩進めて、例えば、行政の働きかけ（仕組み）として「この地域から何名選出する」といった、ある程度強制力を持たせた制度的関与も検討すべきである。

■ グループC：日常的なふれあいが生きがいを生む「複合型コミュニティスクール」  
(発表：C委員)

視点1：ハード面：五感に訴える給食室と、誰もがふらっと寄れる空間

- 「見せる」給食室：給食室をガラス張りにするなどして外から見えるようにし、さらに「匂い」も周囲に広がるような設計にする。地域住民がいつでも入ってきて、子どもたちと「一緒に給食を食べられる給食室」を創出する。
- 公民館機能との複合化：住民が気軽に利用できる多目的室や調理室、明るい図書館を内包し、学校でありながら「公民館」でもあるような複合施設にする。
- 防災拠点の機能強化：災害時の安心・安全を守るため、体育館へのエアコン完備は必須。これにより、平時（児童クラブ、地域クラブ、社会体育）の利用環境が向上するだけでなく、夏場などの災害避難時にも高齢者や子どもが涼しく過ごせる空間となる。

視点2：ソフト面：施設の開放がもたらすボランティアの自然発生

- 「構えずに」関われる関係性：施設が地域に開かれ、日常的に住民が学校を利用できるようになれば、「何か手伝えることはないか」という声が住民側から自然と湧き出てくる。ボランティアへ「行くぞ」と身構えることなく、誰もが気軽に学校へ足を運べる環境こそが重要。
- 教員不足を補う町民の力：先生方のリソース不足（学習指導や、技能教科などのサポート）に対し、町民の特技や知識を活かして授業をバックアップする。
- 世代間交流の相乗効果：子どもの元気な声を聞くことで地域の高齢者も元気になり、町民が繋がり合うことで、双方が「生きがい」や「やりがい」を感じられる学校を目指す。

(5) 講評 委員長

● 今回のテーマ「つくる」：3つの「場」の創造

今回の議論の核となる「つくる」という言葉から、具体的に以下の3つの場をデザインしていく方向性について話をされた。

① 子どもの育つ場・学びの場

- **9年間の連続性**：小中一貫教育のメリットを活かし、9年間という連続した流れの中で、段階的に地域の良さを伝え、学ぶ力・社会性・体力を連続的に育てる。
- **発達段階に応じた環境づくり（委員長からの環境設計案）**：
  - **低学年（1・2年生）**：これまでの安心できる環境の中で、担任の先生とじっくり様々な教科学習や活動を行う。
  - **中学年（3年生～）**：社会性の広がりに合わせて、特別教室などへ移動し、学校全体を学びの場として活用し始める。
  - **高学年（中学生段階）**：教科担任制の導入に伴い、教科ごとに特色や環境が整えられた教室（環境）へ、生徒が自ら赴いて能動的に活動する。
- **幅広い交流の確保**：規模拡大によるメリット（幅広い交流の力）を活かせるよう、ハード・ソフト両面で施設づくりを工夫する。

## ② 地域の間

- 学校を地域住民の交流や活動の拠点とし、地域の人々が学校内に入り込んで子どもの活動を支える仕組みを作る。

## ③ 町づくりの間

- 学校が、町での生活をより魅力的にする拠点となる。
- 「用事がなくても誰でも自由に赴き、心地よい時間を過ごせる場所」として、図書館とカフェの機能を融合した「ブックカフェ」のような空間を学校内に内包させてはどうか。（居場所の創出）
- 施設に良寛の書、出雲崎の特産や良さが感じられる仕組みを取り入れ、「施設丸ごと博物館」「施設丸ごと図書館」「施設丸ごと学校」といった、町と一体となったコンセプトを描く。

## ● 次回への展望

各グループの議論には、上記の「間」を作るための手がかりとなる言葉がすでにたくさん溢れていた。次回は、これらをベースに「もう少しまちづくりに踏み込んだ、具体的な段階（デザインや機能の具体化）」へと議論を深めていく。

## 4 その他

- 次回の開催についての連絡
- 小中一貫教育校（湯沢学園）の視察案内

## 5 閉会